

技術・職業教育研究の20世紀から21世紀へ

佐々木 享

20世紀から21世紀へ

20世紀は、西欧列強諸国が植民地収奪に血道をあげる帝国主義の時代として幕をあけた。東洋の1小国日本は、自らはようやく資本主義的経済循環の道を歩み始めたばかりなのに、西欧の列強諸国から離れているという地の利を活用して早くも帝国主義諸国の仲間入りをし、朝鮮、中国に植民地化を求める戦争を始めた。以来半世紀、日本は天皇制の支配下で1945年の敗戦に至るまで、ひたすら戦争と植民地収奪に明け暮れた。教育もまたひたすらそのために奉仕することを強いられた。

20世紀後半の地球には全く違った様相が現れた。お隣の中国をはじめアジア・アフリカに広がっていた植民地従属国が相次いで独立し、民族自決の道を歩み始めた。こうした中で私たちの日本も、支配勢力が帝国主義的な野望を放棄しないアメリカの核の傘の下に入るという人民からみれば不本意な状況はあるにせよ、戦争放棄を謳った日本国憲法第9条を高く掲げ、諸国民と連帯して平和の実現をめざす道を選択した。以来半世紀、日本人は幸いに戦乱に巻き込まれずに平和な社会生活を送って今日に至っている。

20世紀前半日本の教育学研究

日本の技術・職業教育についていえば、20世紀の前半は、実業学校令（1899年）、専門学校令（1903年）などにより世紀転換期には教

育制度が相次いで整備され、それらは富国強兵に奉仕すべくひたすら拡大の道歩んだ。教育学研究も天皇制教学体制に奉仕すべきものとされ、政策展開のための支配者側による研究はあったにせよ、科学的な教育学の観点からの「研究」と呼べるようなものは皆無に近かった。

敗戦後、事情は大きく変わったはずなのに、筆者が教育学研究に関心を持ち始めた1960年代前後には、教育学の世界には読むに値する大著というべきものはまだ存在しなかったように私には思われた。これは寂しいことだった。そんなことを長谷川淳先生に申し上げたら、阿部重孝はどうですかと言われた。この言葉がきっかけとなって阿部の著作を読みあさるうちに「教師は研究者なのだ」という阿部の言葉を発見し、大きく勇気づけられ、喜んだ。その後、まだ若かった山住正巳さんも同じことを言って筆者を励ましてくれた。

紙幅が限られているのでやや乱暴な言い方をすれば、いくらかでも科学的といえる教育学研究は、とくに教育課程研究は1930年代に阿部重孝により始められた、と私は考えている。その阿部の著作は、1970年代に『阿部重孝著作集』全7巻（日本図書センター）としてまとめられた。私にはもちろん、日本の教育学のために嬉しいことだった。暫く後の20世紀の最後の90年代には、阿部重孝批判を含む佐藤広美の大著『総力戦体制と教育科学

——戦前教育科学研究会における「教育改革」論の研究』(1997年、大月書店)も刊行された。佐藤には阿部は批判に値すると思われたのであろう。ところで、1999年に阿部邦夫『教育学者阿部重孝余話』[私家版]が刊行された。重孝の甥にあたる邦夫氏から『著作集』刊行の経緯を問われたことがあり、やむなく筆者が刊行のきっかけを提供したと告白するとともに、このことを編者の寺崎、伊ヶ崎両氏にもお伝えした。

20世紀後半の日本における技術・職業教育研究

阿部重孝には技術教育あるいは職業教育に関する労作は殆どなく、僅かに、職業指導に関する小さな文章があるに過ぎない。しかしこの文筆は今なお読むに値する。

日本における技術・職業教育の科学的な研究は、大戦末期の桐原葆見、細谷俊夫らのしごとから始まったと言って過言ではない。その記念碑的著作は細谷俊夫『技術教育——成立と課題』(1944年、目黒書店)である。この書物は古書店で入手することも難しいが、『技術教育概論』(1977年、東京大学出版会)は概ね前著を拡充したものとみてよい。労働科学研究をバックとした桐原の主張は、桐原葆見『生産技術教育』(1960年、国土社)から読みとることができる。

1960年1月には私たちの技術教育研究会が発足した。同じ年の秋には、細谷・桐原二人の呼びかけで日本産業教育学会が創立された。この頃から、技術・職業教育の科学的な研究が始まったといえよう。(これより少し前に発足していた日本産業技術教育学会は教員養成大学の職業科——のち技術科——の関係者を網羅した組織であるが、学会としての内実を備えるべく努力し始めるのはかなり後のことのように思われる。)

拙稿「日本における技術・職業教育史研究の展望と課題——学校教育の分野に限定して」(『日本教育史研究』第17号、1997年7月)

は、サブタイトルにあるように歴史的な研究、しかも学校教育の分野に限ってこの時期以後の技術・職業教育研究を概観したものである。(少しだけ残部があるので、ご連絡下さればお送りできる。)この「展望と課題」刊行以後の大きな著作としては、清原道寿『昭和技術教育史』(1997年、農山漁村文化協会)、三好信浩『手島精一と日本工業教育発達史』(1999年、風間書房)などがある。この清原の著書については、斉藤健次郎による興味深い書評が日本産業教育学会の機関誌『産業教育学研究』第29巻第1号(1999年1月)に掲載されている。学校教育と言ってもとにかく見落とされがちな(戦後の)専門学校については、外国人から見た労作として、韓民『現代日本の専門学校——高等職業教育の意義と課題』(1996年、玉川大学出版部)があることに注目しておきたい。ちなみに旧制については、天野郁夫『旧制専門学校論』(1993年、玉川大学出版部)がある。

なお本稿では山崎昌甫氏による別稿があることを考慮して職業訓練関係には触れないが、学卒者の就職問題を歴史的・実証的に整理した苅谷剛彦・菅山真次・石田浩『学校・職安と労働市場——戦後新規学卒市場の制度化過程』(2000年、東京大学出版会)だけは紹介しておきたい。

前掲の「展望と課題」はその視野を日本の技術・職業教育に限定していたが、外国の技術・職業教育に関する研究成果としては、田中喜美『技術教育の形成と展開——米国技術教育実践史論』(1993年、多賀出版)、寺田盛紀『近代ドイツ職業教育制度史研究——デュアルシステムの社会史的・教育史的横造』(1996年、風間書房)、堀内達夫『フランス技術教育成立史の研究——エコール・ポリテクニクの技術者養成』(1997年、多賀出版)、佐々木英一『ドイツにおける職業教育・訓練の展開と構造——デュアルシステムの公共性の構造と問題性』(1997年、風間書房)などがある。

ようやく20世紀の末にいたり、「技術教育、職業教育の分野にはこういう労作がありません」といえるようになったわけである。最近の緻密な労作としては、木下順『アメリカ技能養成と労使関係——メカニックからマンパワーへ』（2000年、ミネルヴァ書房）がたいへん面白かった。

このようなしっかりした先達の労作は、読むのに時間を要するが、この種のいわゆる固い労作に学ぶ姿勢を大事にしたい。

技術・職業教育研究への期待と希望

21世紀への筆者の希望は、世界のすべての人びとが平和な生活を安穩に送ることができるような社会が到来することである。新自由主義が喧しい昨今、座視してそんな社会が実現するはずはないから、自らもそのような社会を実現するために残された微力を尽くしたいと思う。そうは言っても筆者個人にできることはごく限られているから、「ものづくり」の基本になる技術教育の科学的で民主的な研究（会）と運動を広め、技術・職業教育研究の水準を高めることに残された力を注ぐことができれば、と願っている。運動を広めなければ力にはならないが、研究水準を高めなくては、手弁当でもこの運動に参加したいという欲求を誘い出す魅力を生み出すことは難しいと思われる。

そこで本稿では論点を研究に絞って、筆者の見聞や経験を通してこれまで研究の弱点やそれを克服する道筋などについての感想を、順不同に並べて今後への期待とする。

(1) 視野を広く

年齢に甘んじて生意気なことを並べることが許していただくとして言えば、極めて僅かな例外をのぞくと、日本における技術・職業教育に関する研究の水準はひどく低い。

その原因は種々あろうが、一つは、技術・職業教育研究を志す人の視野が意外に狭いこ

とである。筆者の師の長谷川淳先生や先輩の原正敏先生はともに工学部出身だが、どこで学ぶ機会があったのか、筆者から見たその視野は、生意気な言い方を許していただくと、人文科学、社会科学にわたって想像以上に広がった。（筆者は、工学部を卒業後文学部に学士入学した。学士入学だから2年か3年で卒業すべきところを5年間——途中で1年間休学したから正確には6年間もかかって卒業したずぼらな学生だったが、ずぼらにせよ、歴史学や経済学を少しは学び文学士になっていた。）たとえば長谷川淳先生は、技術教育を学ぼうとする者が『資本論』の第1巻第13章を読んでいるのは当然だという前提で筆者にいろいろなことを話題にした。そして、この種の当然に知っているべきことを知らないで平気である人をてんから相手にしなかった。その意味でたいへん怖い先生だった。

技術・職業教育を研究するにしても、自らの研究（対象）の位置づけを明確にするためには、最低限の社会科学の知識や歴史認識が求められるはずだと筆者などは考える。技術や労働の世界を論ずるには、労働と労働力の概念の厳密な区別や憲法にいう「職業選択の自由」の意味するところを厳密に知ることが求められる。残念ながら、筆者は労働と労働力概念の区別ができない商業担当の教師に出合ったことがある。長谷川先生だったらどう対応するのだろうかと困惑したものである。また「職業選択の自由」の意味するところを厳密に理解していないと、公的な職業資格と技能検定を混同したりすることが起こる。

経済学や歴史の基礎は自学自習すればよいのだし、筆者の育った時期にはそれが当たり前とされていたが、近年はそれは必ずしも当然ではないらしい。しかし前任校では日本資本主義発達史や西洋経済史を講義するわけにもいかず、やむを得ずゼミ合宿の際に、必ず近刊の日本近代史や日本経済史関係の著作をテキストとして学習する機会を設けることと

していた。そこには、教育学以外の学問の世界の研究水準のにおいをかいでもらいたいという密かな願いもあった。

(2) 技術・職業教育を幅広くとらえよう

筆者は敢えて「技術・職業教育」という言葉を掲げ、かつこの言葉にこだわっている。というのは、技術科あるいは工業科のことしか研究しようとしなない人が意外に多いことを苦々しく思っているからである。専門的に深めることはよいけれども、視野をもっと広げて技術・職業教育の専門家になって欲しいという希望が筆者にはある。ここにはある程度はやむを得ない事情もある。中学校と高等学校では、中学校の技術科及び高等学校の職業の各教科並びにこの度高等学校に新設された「情報」をのぞくと、中学校あるいは高等学校にのみ存在する教科はなく、中学校にある教科は全て高等学校にも開設されている。したがって当該教科の専門家という以上は中学校と高等学校とに通じていることが求められる。これに対して技術科と高等学校の職業科に限ってはそういう条件がないので、ごく狭い範囲だけが自分の専門だと思いきみ易い宿命にある。その宿命を自覚するかどうかは、各自の問題である。幸いに技術教育研究会では中学校勤務の者も高等学校勤務の者もともに学ぶ機会が多いのだから、科学的な研究をめざす者はこの好条件を積極的に活用すべきだと思われる。

筆者自身がこんなことを考えるに至った直接の契機は、以前技術教育研究会の『会報』に書いたことだが、高等学校教育と職業訓練との関係を論じた原正敏先生の最初の論文(教員組合の教研集会へのレポート)に目を開かれた思いを忘れることができないからである。この論文を読むまで筆者は職業訓練のことを全く知らなかった。知らなかったこと自体は決して恥ではないにせよ、これでは技術・職業教育を幅広くとらえることはできないと

知り、それから職業訓練に関心をもち問題点を学ぶようになった。

ごく最近の例をあげると、筆者は農業高等学校の農場収入に関するいわゆる還元金制度について小さな文章をまとめた。この件を周囲の2、3の人に話をしたところ、技術教育を勉強しているという人にも意外に知られていないことを知った。農業教育に携わる人たちがきちんと論点を提示しなかったからこういうことが起こるのだが、工業教育を専門にしているから、と知らないで済ましてはいけな問題であると筆者には思われる。

(3) 先輩・友人を大切に

筆者が技術・職業教育の諸問題を学び始めた頃は、希少価値をもっていた長谷川淳先生などをのぞくと、学ぶべき師は事実上存在しなかった。だから、こうした師や原正敏先生のような先達に知己になっていただいたことは、筆者には何にもまして重要な財産だった。教育学については、その多くを教科研(教育科学研究会)の先輩や友人に学んだ。しかしこの種の「先輩や友人」なるものは、向こうから近づいてきてくれるわけではない。こちらの側に学ぶ姿勢があつて初めてできる関係である。誰も授業料を要求する人はいなかった。筆者は、あの勝田守一先生も当然のように1会員として参加費を払って教科研大会に参加する姿を見て、安い授業料を払うつもりで民間教育研究運動に参加してきた。

ごく一部の人をのぞくと、今日でもしっかりした技術・職業教育の師に恵まれている人はないに等しいはずである。学ぼうとする先達があり、知己・友人になってもらえそうな人がいる機会に巡り会ったら、その機会を逃さずに、積極的に交遊の場を拓ける努力をすることを勧めます。

いろいろな研究会や学会の懇親会は、こちらから尋ねることがなければただ会費が高いだけのつまらない場に過ぎない。しかし、尋

ねること、教えて欲しいことがあるのなら、然るべき人に知己になってもらえる可能性がある有益な場である。筆者は懇親会をそのような場として活用してきた。

(4) 研究の方法論を身につけよう

研究の方法論は、見よう見まねで身につけることもできるけれども、いかにも能率が悪い。機会をつくって早い時期に方法論を学んでおきたい。筆者自身は工学部学生の4年目くらいの頃から社会科学の古典を乱読するなかで学んだと記憶するが、これも能率が悪いから、忙しい人にはお勧めできない。

筆者の一世代上のしっかりした研究者たちはまずヘーゲルを学び、しかる後にマルクス、エンゲルスの古典を学び、弁証法を身につけたように思われる。確かに、ヘーゲルで弁証法を学びそれをひっくり返して（ないし肉付けして）唯物論的な弁証法を学ぶことは、弁証法を奥深くとらえる本格的な道であるように思われる。（筆者の身近に、若いのに非常にしっかりした方法論を身につけている教育研究者がいる。尋ねてみたら、学部時代にヘーゲルから学び始めたとのことだった。）

諸運動に参加することに忙しかったし、ものぐさでもある筆者には、こういうオーソドックスな道を選ぶ心の（時間的な）余裕がなかった。それを言い訳にして筆者が選んだ道は、ヘーゲルを批判的に読みながら唯物弁証法の真髄を書き留めたレーニンの『哲学ノート』を繰り返し読むことだった。これは、一遍に両方を学べる点で能率的で確実な方法だと今でも思っている。

ある機会にこのことを田中喜美氏に話したら、まだ一度も本格的な論文を書いた経験を持たない学部生や修士課程1年くらいの院生が『哲学ノート』を理解することは難しいのではないかと、言われた。そんなことを言っていると、ほんものを学ぼうとする現場教師の志気をそいでしまう恐れなしとしない。学

習する道は唯一つではないから無理強いするつもりはないけれども、積極的に挑戦していただきたいものである。

(5) 論文要旨はしっかりと

前任校である機会に、院生諸氏は自分の論文の「要約」（いわゆるレジюме）を書くのがひどく下手なことに気づいた。極言すれば目的や課題意識ばかり並べて、何を書いたのかが書かれていないのである。そういう指導をしたことがなかったことを反省して、何回か繰り返して訓練したことがある。実はそういう目でみると、日本教育学会の発表要旨などをみると概して要旨の書き方が乱雑なので、改善すべき旨を『教育学研究』（第67巻第1号、2000年3月）に投稿したことがある。

例外があった。ゼミで練習した時に、要旨の書き方が抜群に上手だったのは、偶々その時筆者の下に内地留学していた隈部智雄氏だった。技術教育研究会常任委員会において吉田喜一氏が折に触れて配布して下さる論文や口頭発表の要旨の書き方は、整然として要を尽くしている。概して理工系の人の「要旨」の書き方は、きちんとして無駄がないようである。少なくともきちんとした研究をしている人はそうである。むしろ「要旨」がきちんとしているか否かは、本文がしっかり書いているか否かに左右される。逆に「要旨」を書いてみて本文の弱点が改めて自覚される場合も少なくない。そういうこともあるので、技術教育研究会の全国大会などでも発表原稿には「要旨」をつけるようにすべきではないかと吉田氏は折に触れて述べておられるがなかなか実現しない。

吉田氏に尋ねると、氏は院生の時代に懇切に指導してくれる教官に恵まれ、辛い思いをしながら訓練して身につけた、現在は自分が学生に厳しく指導しているとのことだった。

筆者はどこで訓練を受けたのかと院生に質問された。そこで、工学部学生の頃、昼間勤

務していた東京工業試験所（現在の第二国立劇場が立地している初台にあった。現在は筑波市に移転し物質工学研究所となっている）で、上司の浜島氏がドイツ語の化学論文を要約するしごとをさせて下さった学恩を思い出した。原文が数頁であろうと数十頁であろうと数行に要約するしごとだった。たんなる訓練ではなく、試験所の雑誌に発表する公的なしごとだったので、原形をとどめないない程真っ赤になるまで繰り返し朱を入れて下さった。2度目は、専修大学で司書のための「自然科学書誌解題」という講義を担当した時だった。自然科学の世界の話だから、単行本の話をしてあまり意味がないので、理工系の雑誌論文や特許公報の話などをした。（講義の後半では「種の起源」のような自然科学の古典を読んだ。）この講義を準備する過程で、「要約」には自分抄録と他人抄録があること、一般的な抄録の他に「偏向抄録」があることなどを知り、この序でに「要約」（抄録）の要件なども説明していた。

細目に立ち入る余裕はないので結論だけを記しておく、権威者による他人抄録の水準に近づけることが自分抄録の目標である。その後種々な機会にいろいろな人の論文や抄録を読む機会があった。抄録がしっかり書けていない論文は論文自体に欠陥のあることが多い。逆に、抄録がしっかりしているのに論文はまるでダメだなどということは滅多にない。

もちろん本来の目標は、（まだ日本の教育学の世界には存在しないけれども）しっかりした論文の（その道の権威者たる他人による）抄録だけを収録する専門誌に抄録が掲載されるに値するような論文を書くことにある。

ここ30年以上、毎年の日教組の教育研究全国集会の分科会の報告・討論のまとめを『日本の教育』に書いている。3～4日にわたる報告・討論の内容を決められた枚数で記述するしごとである。この場合、たんに客観的に要約し記述すればよいというものではなく、同時に筆者の評価が読者に伝わるよう記述することを企図している。考えてみればこれも筆者には厳しい訓練の場になっていたことになる。こんなことを考えると、技術教育研究会の分科会の報告・討論をまとめるしごとは格好の学習の機会となっていることになる。そのつもりで、敬遠せずにこの面倒なしごとにとり組んでいただきたいものである。

(6) 体を丈夫に

筆者には自ら慰め、密かに誇りとする幾つかの記録がある。技術教育研究会の全国大会に第1回から途切れることなく参加していることもその一つである。（教育科学研究会の全国大会へは、日程が技教研大会と重なったために1回だけ参加できなかった年がある。）こんなことができたのは、煎じ詰めれば健康に恵まれたからである。（大学に席をもつ研究者だったのに在外研究の機会がなかったという理由もある。）

体が健康でなければ、研究も運動もできない。民間教育研究運動に参加していると、周囲の事情などから忙しさに追われ、不健康な生活を強いられがちである。21世紀の技術・職業教育研究を豊かに発展させるためにも、各位は健康に留意してほしいと強く願う。

（技術教育研究会常任委員、愛知大学短期大学部）